

# Xzg+学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

## Outcome report

計画名 Plan	タイ北部山地に関する研究
氏名 Name	岩井華代
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻 1年
渡航国 Country	タイ
渡航日程 Travel schedule	2023年 1月 16日 ~ 2023年 3月 16日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

### 渡航計画の概要 Outline of the travel plan

#### 研究目的

本研究は、タイ北部に存在する戦争モニュメントを対象として、第二次世界大戦の記憶がどのように継承されているのかを明らかにするものである。

#### 研究対象

##### ①第二次世界大戦に関連するモニュメント

具体的に本研究で扱うのは、ミュージアム、慰霊碑、記念碑や像、遺跡である。

##### ②地元住人

上記のようなモニュメントに関わる地元住人を対象に、インタビュー調査を行う。モニュメントの管理・維持に関与する者およびモニュメント周辺に居住する者を対象とする。

#### 研究内容・方法

##### ①文献調査

クンユアムおよびメーホンソーン県に関する文献に加え、タイにおける第二次世界大戦および戦争遺跡に関する文献収集を行う。

##### ②戦争モニュメントと地元住人

まず、戦争モニュメントを外側から分析する。つまり、モニュメントが据えられている場所、使われている材料、デザイン、説明文、ミュージアムであれば展示物等である。

次に、モニュメントに内在する歴史、「戦争」記憶の仕方の変遷を明らかにする。具体的に、建てられた経緯、時期、建てた人物や団体、補修の過程、コンセプトの変遷などだ。これらは、モニュメント関係者より聞き取り調査を行う。

最後に、モニュメントと地元住人との関係性を明らかにする。モニュメントの管理・維持にかかわる者に対しては、どのような考えをもってモニュメントにアプローチしてきたのかについて、インタビュー調査を行う。また、地元住人に対しては、モニュメントを訪れる頻度、目的、モニュメントに対する考えについてのインタビュー調査を行う。加えて、外部アクター(慰霊碑を建立した団体等)とモニュメントとの関わりについて検討する。

## 成果 Outcome

本報告書においては、主な調査地としたメーホンソーン県クンユアムにおける調査成果を示す。

### ①様々な人々の思惑—タイ日友好記念館—

まず、タイ日友好記念館が辿ってきた歴史を概観する。1996年、クンユアム警察署長であるチョムタワット氏が、第二次世界大戦中の日本兵の遺留品を展示する「第二次世界大戦博物館」を設立する。2007年に、記念館の管轄機関がクンユアム自治体に移管される。2012年には、新たな都市計画の話が持ち上がり、その一環として博物館の建て替え案が出る。建築デザインは、住民側の意見を尊重したデザインとなり、名前も「タイ日友好記念館」に変更された。



次に、展示内容を簡単に示す。1階部分では、クンユアムの歴史の概要および第二次世界大戦中の日本兵に関しての内容が扱われている。クンユアムの住人と日本兵との関係に関するビデオルームも存在する。半地下の階では、クンユアムの人口の大半を占めるタイヤイ族の文化紹介が行われている。年間行事や食文化、文字等に関する展示だ。

タイ日友好記念館に関する調査を経て、この建物が保有する「戦争」記憶のあり方を明らかにすることができた。中心的な人物および機関は以下の通りである。

タイ日友好記念館に関する調査を経て、この建物が保有する「戦争」記憶のあり方を明らかにすることができた。中心的な人物および機関は以下の通りである。

#### 1. チョムタワット氏

現「タイ日友好記念館」を設立した人物である。1995年、クンユアムに警察署長として赴任してきた彼は、多くの地元住人が日本兵の遺留品を所有していることに気がつき、収集を始める。その後、1996年に「第二次世界大戦博物館」として、収集品を雑多に展示した博物館を設立する。2007年に、彼はチェンマイの警察署へ転任することになり、それと同時に、管轄機関がクンユアム自治体が変わった。

#### 2. クンユアム自治体

2007年以降、記念館の維持・管理を行っている。

##### 2-1. タイ日友好祭

年に一度、クンユアム自治体を運営主体として行われるイベントである。日本側の関与としては、在チェンマイ日本国総領事館より、職員が挨拶に訪問するのみである。祭りの運営への関与はなく、出資などもしていない。

地元住人にとってのタイ日友好祭の位置づけは、祭りの内容から読み取ることができる。初日は、まさに「タイと日本の友好関係」が協調された内容となっている。在チェンマイ総領事館職員からの挨拶や、日本の着物を着た地元の若い女性たちによるミスコンテスト、クンユアムに居住する各民族(タイヤイ、カレン、モン等)の伝統的な踊りの披露などだ。しかし、2日目以降は、タイ人バンドグループの公演や、地元住人参加型の踊りの空間(日本で言うならば、盆踊り)が展開される。

ある住人によると、タイ日友好祭は、日本との友好関係に焦点を当てるよりも、若者への文化継承の場としての重要性が増してきているという。

##### 2-2. "Little Japan"

クンユアム自治体および外部財団により提案された、日本人長期滞在者向けの都市開発案である。しかし、地元住人の反対により、話自体が頓挫する。また同じ時期に、記念館も大きな

転機を迎える。建物デザインはタイヤイ様式に変わり、展示内容はこれまでの日本兵に関するものに加え、タイヤイ族の文化に関する展示が加わり、さらに施設の名前が「第二次世界大戦博物館」から「タイ日友好記念館」に変わる。

### 3. 学校機関

本調査では、地元の高校教師に対してインタビュー調査を行った。その結果、本校では高校1年生の授業の一環で、タイ日友好記念館に訪れていることが分かった。また、歴史の授業や任意の日本語の授業において、第二次世界大戦や日本兵に関する内容が扱われるという。特に歴史の授業では、主流とされる歴史のみでなく、クンユアムに残るローカルな歴史を提示することにより、さまざまな観点・立場から歴史的事実を捉えることを意図した授業展開をしている。

地元住人は、学校教育において本記念館を訪れているため、普段個人的に訪れることはないという。しかし、記念館自体の存在意義については、観光客や子どもたちの学習の場となるため、必要だと考えている。

## ②外部団体との繋がり－慰霊碑－

### 1. ムアイトー寺

#### (A) “ビルマ戦線将兵鎮魂之碑”

埼玉県草加市の南風会により、1995年11月に建立された。



#### (B) “日本軍将兵遺骨埋葬の地”

井上朝義および一法師光江により建立された。



#### (C) “Rest in Peace”

クンユアム会により、2011年に建立された。ムアイトー寺および日蓮宗本照寺が協賛している。



## 2. トーペー寺

### “タイビルマ方面戦病没者追悼の碑”



(2023年1月19日撮影)



(2023年2月15日撮影)

これらの慰霊碑の維持・管理は、クンユアムに在住する唯一の日本人男性が、各団体から依頼を受けて行っている。彼は、地元の高校において日本語教師をしており、毎週生徒を連れて、慰霊碑周りの掃除を行っている。また、トーペー寺の慰霊碑の2枚の写真は、改修工事前後のものである。ちょうど2023年1月に改修工事が行われた。この人物以外に、寺の僧を含め、現地で慰霊碑を管理している者はいない。また、彼の後任となるような人物は現時点では存在しない。

慰霊碑に関しては、周辺に住む地元住人が関わっている様子は見受けられなかった。存在は知っているが、実際に見たことはないという人もいた。

## 総括

以上の調査結果から、次の二つの結論を導き出すことができる。

一つは、様々な人物および団体の思惑が絡まり合うことにより、第二次世界大戦時の地元住人と日本兵との記憶が、その記憶のあり方を変容させつつも、今日に至るまで継承されてきているということだ。具体的には、チョムタワット氏の個人的な興味関心、クンユアム自治体の町おこしの目論見、教育内容への取り込み等である。様々な人々が関わることにより、モニュメントの存在意義は、本来の意図とは異なる形態に変容していつている。しかし、逆に言うならば、これらの関与がなければ、記憶の継承そのものが危うくなっていた可能性があるのではないだろうか。

二つ目は、外部団体との緩やかな繋がりにより、慰霊碑が維持されている、ということだ。現在慰霊碑を管理している日本人男性は、慰霊碑とは関係なく、この地に住むことを決意した。つまり、彼と慰霊碑団体との関係は、偶然成り立ったものだと言える。きっかけとしては、決して強固とは言い難い関係性のもとに、慰霊碑の維持が成り立っている。したがって、タイ北部山地における第二次世界大戦時の記憶というものは、しなやかさと脆弱さを同時に備えつつ、継承されてきている、とすることができる。

## 今後の展望 Prospects for the future

### ①対象地域の拡大

本調査は、メーホンソーン県クンユアムを主な調査地とした。今後は、調査地域を広げて、詳細な調査を行う予定である。なぜなら、タイ北部一帯に広がる山地を一つの地域として括り、「戦争」記憶の継承に関する、この地域特有の要素を見出したいと考えるからである。本調査は、その一事例として位置づけている。今後、各地域の事例を収集し、その共通点および相違点を検討していきたい。

### ②モニュメントのもつ「戦争」記憶と人々の「戦争」語りの相互関係

本調査では、モニュメントのもつ「戦争」記憶のあり方やその継承方法が変容していく様をとらえた。今後は、モニュメントのもつ「戦争」記憶と人びとの「戦争」語りとが、互いに影響を及ぼし合いつつ、その記憶のあり方を変化させている様を捉えたい。